
テンプレのてんぷら

まいまい?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレのてんぷら

【Nコード】

N5926M

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

いつも通りの朝のはずだったのに、目が覚めたらそこは異世界で。

魔物に襲われた所を助けられたり、精霊を仲間にしたたり。

城下町で女の子助けたら、それがなんと姫様で、王様の所へ行くことに。

魔王退治を依頼され、仲間を増やし、困難？を乗り越えて、魔王を倒す話。

1話がなんと200字！　すらすら読めるって程度じゃない！
ご都合主義・超展開は当たり前。だって、ご都合主義で超展開な
んだもの！

100話で完結する・★は挿絵あり

0・目が覚めたら異世界かよ!★(前書き)

「テンプレ? なにそれ、おいしいの?」

僕は「テンプレ」と言うものを、口に含んでみた。

「……香ばしい感じだな……でも、意外といける、かも?」

異世界召還、主人公最強?

なんかそんな感じの使い古された何番煎じ?

よくある物語を1話200字縛りで、簡潔にお届けするのがモットー。

それで話が成り立つのか。

本当にそれでいいのか?

読者を飽きさせることなく、最後まで書き終えることができるのか?

(読者がいればだけだね!)

0・目が覚めたら異世界かよ!★

声が聞こえる。

「もう、この子……たら、いつまで寝て……の?」
これは、母さんの声。眠くて、言葉がよく聞き取れない。

「……」
僕の体はまだ目覚めていない。

「早く起きなさいね! わかった?」
「……う、ん」
そして起きたら、そこは見知らぬ場所。

「ここは、どこ?」
ていうか、布団まで消えているんですけど。そして、なぜか靴や制服が辺りに散らばっている……
僕はそれらを拾い集め、制服に着替えた。

……パジャマよりはましか。

0・目が覚めたら異世界かよ!★(後書き)

>i10537—312<

あらすじも、まえがきも、あとがきも、この作品は、全部200字で書く!

この作品における、強いこだわりはそれくらい。

今の段階で、60話あたりまで2日おきに予約投稿しているので、11月くらいまでは、勝手に投稿され、更新の滞りありません。

ちなみに、大体の流れはできているので、更新が遅れたとしても、全くしなくなることは無いと思います。

のんびりしたらだと話は進んでいく、そんな感じですが、よろしくお願いします。

1・わけがわからないよ!★

本当に、ここどこだろう？

外国に来た記憶はない？

もしかして、記憶喪失？

そういえば、荷物がない。

服も散らばっていたしな……

もしかして……盗られた？

平和な日本に住んでいたから、強盗に襲われてあまりのショックで？

覚えている最後の記憶は、母さんが起こしにくる声……

もしかして、どこかへ行く日だったのかな？

ここに来る前から、今までの記憶が飛んだの？　そうなの？　どうなの？

でも、なんで、気がついたらパジャマだったの？

1・わけがわからないよ!★(後書き)

>i10538|312<

2・あはは、魔物ですか、魔物のご登場だよ?★

「靴があつたのは助かったな」

この草や石の上を裸足で歩きたくはなかった。

「ここはどこだろう?」

地平線なんて日本ではあまりお目にかかれない。

考えながら歩いていると、向こうから大きな鳥が。

牙が爪が鋭い。

絶対に肉食だ。

本当に本当に鳥だよね?

ここってもしかして……異世界?

何も持たない僕は死を覚悟し、目を閉じた。

しかし、その時はやってこない。

僕は目を開けた。

「大丈夫か？」

目の前に、きれいなお姉さんがいました。

2・あはは、魔物ですか、魔物のご登場だよ？★（後書き）

＞i10532—312＜

タオルで作る、鳥と行き倒れ！！

タオル一枚あれば、なんと！ 鳥が作れちゃう！！
なんと！ 行き倒れが作れちゃう！！

それから、あとは、タオル一枚あれば、シジミも作れるの！！

ほかにも、いろいろ作れるのは知っているけれども、立ち読みで覚えたのは、これくらいなのだ！
本当にいろいろ作れるのだ！！！！

飲み会の場で、これをやると、結構うけるのよ。

みんなのタオルを奪いまくって、鳥と行き倒れを量産するのは、自分の悪い癖です。

3・ネコミミではなく、トラミミだったよ！

ネコミミ？

いや、トラミミだ。

黒い耳に白い斑がついてるもん。トラミミっ娘だ！

「大丈夫みたいね。私は シイラ。あなたは？」

「僕は、鈴木誠吾。誠吾が名前ね」

「セイゴね。見かけない種族ね。あなたの種族は？」

「僕は、人間だよ」

「それはわかるわ、私はトラ族よ」

む、どう答えたら？

「サル、かな？」

サルから進化したって言うし。

「なるほどね……サル族って、珍しいわね。初めて会ったわ」

「僕の国？では、普通なんだけどね」

4・記憶喪失ってことにしたよ。

「どうしてこんなところに？ 旅人にしては、身軽すぎるし」
確かに、僕の荷物といたらパジャマしかないのだ。

「……僕も何でここにいるのか……」

「あら、記憶喪失？」

本当に戸惑い困った顔をしていたので、そう思ったのだろう。

「……うん」

そう言うことにしておいた方が、いいかもしれない。この世界のこと、知らなさ過ぎるから。

「私の村に来る？ 歓迎するわ」

「ありがとう。色々わからなくて、迷惑掛けと思うけど、よろしく」

4-2・不思議な少年。（シイラ視点）

私が出会ったのは、弟のシクリッドと、同じ年くらいのサル族の少年。

旅をするにはあまりにも軽装で、連れがいるのかもしれない思ったのが、尋ねてみると、彼は自分の置かれている状況を、今思い出したかのように、とても困惑していた。

「……僕も何でここにいるのか……」
記憶喪失。

私の脳裏に、浮かんだ言葉。

「私の村に来る？ 歓迎するわ」

大丈夫、お姉さんが、あなたを守ってあげるからね。守れなかった弟へのせめてもの償い。

5・実は、こう見えて器用なんだよ。

「サル族は器用っていうけれど、噂通りね」

シイラは僕の制服を見てそう言う。

服の縫い目やボタンの装飾が、とても繊細で美しいらしい。これを作ったのはおそらく機械だけれど、まあいいや。

「僕は、この服作れないけれどね。でも、器用な方ではあると思う」

1cmの折り紙で鶴が折れるくらいには器用だけれど、ここでは役に立たないだろうな。

折り紙で虎を作ってあげたら、喜ぶかな？

今の僕には、それくらいしかお礼ができない。

5・実は、こう見えて器用なんだよ。（後書き）

割り箸の袋があらうものならば、それで正方形の紙をちぎっては、小さな折り紙を量産してしまうのです。

飲み会で、みんなが騒いでいるのに、隅のほうで、ちまちまちまちま、作業しているよ。

> i 1 0 5 3 5 — 3 1 2 <

これは、8 mmくらいにちぎった紙で作り上げた小さな折鶴なのだ！

ちなみに、これは、人差し指だ！

ちょっとぐちゃぐちゃなのは、器用ではあるけれど、大雑把な性格のせい。

大きな折り紙で折っても、ちょっとぐっちゃとなってしまいう仕様だよ。

6・この世界には、魔王がいるみたいだよ。

「まあ、とにかく村へ急ぎましょう」

シイラは強かった。現れる魔物をあつという間に、やっつけていく。

「街道付近には弱めなのしかないけれど、最近多くて」

魔王と名乗る者が現れてから、魔物をよく見かけるようになったらしい。

「僕も……何かお手伝いできればいいのだけれど」

魔物はおろか普通の獣だって殺したことがない。もちろん、戦い方も知らない。

「いいの。お姉さんに任せておきなさい」

はい、とても頼りにしています。

7・ちいさな村に着いたよ。★

空が夕焼けの色に染まる頃、村に着いた。

「この中に入れば安心ね。怖い魔物はもう寄ってこないわ」

村には簡単な結界が張ってあって、魔物の侵入を防いでいるらしい。あの魔物たちにもう遭わなくてすむと思うと、安心のあまり涙が出てきそうになった。

「シイラに会わなかったら、僕……生きて村に着くことができなかった」

「もう、男の子なんだから、泣かないの！ 村の人への挨拶は明日にして、今日は休みましょう。私の家はこっちよ」

7・ちいさな村に着いたよ。★(後書き)

>i10539|312<

7-2・眠る少年（シイラ視点）

「よっぽど疲れていたのね」

パジャマと言う物に着替え、あつという間に眠りについたセイゴを見守る。

「明らかに、旅慣れしていなかったもの」

走ればすぐに息を切らし、歩くスピードも時間とともにゆっくりになっていった。言葉に出していいなかったが、きっと足も痛かったに違いない。

「無理させちゃったかしら」

服も旅に向いているとは言えない物だったし、剣を知らない綺麗な手だった。セイゴは貴族か何かだったのだろうか。

8・夢に神様？が出てきたよ。

誰かが、夢の中に入ってくる。

「……私は神……貴方をこの世界に……召喚した」

神？ 僕を呼んだ？

おまえが、元凶か！ 僕に何をさせる気だ！

「魔王を倒して……」

やっぱり、そういうテンプレか。

じゃあ、何か力欲しいよ。このままだと、普通の獣でさえ倒せないよ。

「私の封印を……」

おい。聞してる？

「私を助けて……」

もしかして、この会話、一方通行だったの？
そうですか。

あーどうすればいいんだー（棒読み）

あ、目が覚めそう。

9・朝のにおいがしたよ。★

見慣れぬ木の天井に、やわらかい光が揺れていた。露の湿った空気が部屋を満たしている。鳥の声が朝を告げていた。

「確か僕は……」

異世界へ来たんだっけ。そして、シイラに助けてもらって……。

慣れない寝床で心配だったが、心地よく眠ることができた。

「布団もいいけれど、これも悪くないな」

目覚めたばかりで、ぼんやりする意識の中、僕はハンモックから降りようとした。

僕はハンモックから落ちた。

訂正。布団の方が起きやすい。

9・朝のにおいがしたよ。★(後書き)

>i10703—312<

10・ごはんを食べるもの一苦労だよ。

「あら、大丈夫？」

み、みられたゝ

「これ、初めてだから、慣れなくて」

「最初は、皆そんなものよ」

シイラは優しく微笑んだ。

「さあ、朝ごはん食べましょう？」

「ええと、これどうやって食べるの？」

パンやスープに似た物はなんとなく分かるのだが、見たことがない実や塊の食べ方が分からない。食器も、使い方が想像できない物がいくつかあった。

「これはね……」

シイラは嫌な顔せず、一つ一つ丁寧に教えてくれる。本当に良い人だ。

10-2・物知らぬ少年（シイラ視点）

「記憶喪失って言うのは大変ね……」

ハンモックから落ちたセイゴを見て私は思った。本当に使ったことがないのかもしれないけれど、セイゴの何もかも初めて見るような行動にハラハラしてしまう。

夕飯の時も思ったのだけれど、この世界では一般的な食器の使い方や、食べ方も分からないなんて……ひとまず、日常生活をつつがなく過ごせるように、あれこれ教えないとね。

私は、新しくできたかわいい「弟」のために、頑張ろうと決めた。

11・この世界について聞いてみたよ。

朝食を食べながら、世界について聞いてみた。

「神話？ 神様？ そういうの知りたいんだけど」

脈絡のない突然の質問にも関わらず、シイラは答えてくれた。

「神は世界を作った後、12匹の聖獣に守護を頼んだらしいわ。ちなみに、この地方の聖獣は白い虎よ」

「今、神はどこに？」

「分からないの。巫女の神託によると、闇に囚われてしまったらしいの。今、魔物が多いのもそのせいだと言われているわ」

はい、夢は現実、僕は勇者、決定だ！

12・考えても始まらない、とにかく今は生活だよ。

この村は、過疎化が進んでいるのか、成人していないのは僕とシイラだけらしい。

村の人は女の人でもガタイが良いので、僕はどうしても小さく見えてしまう。種族の差なのか、僕が小さいだけなのか。

そのせいもあってか「セイゴは、私達の子供だよ」と、皆からなでなでとかわいがられている。

特にウマ族のタウナギ爺さんとは、仲良くなった。

心臓が弱いので、走るなど言われているが、老人とは思えないたくましい蹄の脚をしていた。

13・山菜取りをするよ。★

「これと同じ物を、採ってきてくれんかの」
手渡されたいくつかの草と、生えている草を見比べながら採っていく。

僕はタウナギ爺さんと山菜やキノコを採りに来ている。何もせずにお世話になっているのは申し訳ないと思ったものの、畑仕事も狩りも加工もできない僕ができる事と言ったら、採取くらいしかないのだ。

「見つけるのが、遅くてごめんなさい」

「ワシも孫と散歩しているようで楽しいから、いいのじゃよ」
爺さんも良い人です。

13・山菜取りをするよ。★(後書き)

>i10540|312<

14・折り紙で虎を作ったよ。★

慣れない事ばかりで大変だったけれど、楽しい数日が過ぎた。

今日は前々から計画していた事を実行しようと思う。

僕は、制服のポケットに入っていたミニ自由帳を正方形に切った。

これで、この村で守り神と崇められている白虎を折る！

実は動物の折り方は何種類かマスターしているのだ！

「僕にはこれくらいしか、お礼はできないけれど。これ、お守り変わりに……」

「ありがとう、大切にするわ」
シイラに抱きしめられた。

……む、胸が！

14・折り紙で虎を作ったよ。★（後書き）

> i 1 0 5 4 1 — 3 1 2 <

トラを折ってみたんだけど、なんだか少しぐっちゃりになった。
やった。

トラというより、ライオンにも見えなくもない。

難しいね、折り紙。

作り方の本を見れば、大抵のものは、なんとなくは折れるんだけど、きれいに折れないことが多い。

たまにごまかしちゃったりするし。

自分は器用なほうだとは思っただけだけど、繊細な作業は苦手なんだよね。

世の中には、リアルなドラゴンや昆虫を1枚の紙から折る人がいますが、すごいですよね。

14-2・器用な少年（シイラ視点）

セイゴは正方形に切った紙で、何やら作っていた。

「助けてもらったから、お礼に……こんなものしか、僕はできないけれど。お守り変わりに……」

手渡されたのは、白い虎を模した物。しかし、私は知っている。

これが1枚の紙を折り曲げたただと言う事を。

すごい！ 虎に見えるわ！ 1枚の紙から、こんな立派な置物が！

「ありがとう、大切にするわ」

ああ、もう、かわいいんだから！

お姉ちゃん、あなたのためなら、頑張っちゃうんだから！

15・また夢に神様が出てきたよ。

「私は、魔王に……魔王を倒して……私を救って」

この世界に来て最初に見たの夢以降、全く姿を見せなかった神が出てきた。言っている事、前と変わらないし。しかも、また、一方的に伝えるだけみたい？

「貴方の村……闇の手が……逃げ……」

囚われているから、神の力がうまく使えないのかな？

……ていうか、何？ 今、嫌なお告げを聞いたよ？ 何？ 危ないの？

「たいへんだあ！ 魔物の群れが！」

その声で目が覚めた。

「えっ？ 何？ 魔物？」

16・魔物の大群が迫ってきているよ。

「セイゴ、逃げるわよ!」

すでに起きていたシイラにそう言われる。

「結界があるから、大丈夫なんじゃないの?」

「ある程度弱い魔物ならね……」

見張りの話によると、魔物の上位種である魔獣が何匹かいるということなのだ。まだ、遠くにいるらしいが、こちらに向かっているようだ。

僕は軽く荷物をまとめ、いくつかの集団に分かれて移動した。

魔物も幾つかの群に分かれる。こちらの様子が分かるかのように……

「逃げ切れるのか?」

17・魔王四天王が出てきたよ。

魔物の足は予想以上に速く、あっという間に魔物の大群に追いつかれてしまった。

「私から逃げられるとでも？」

魔物に騎乗している黄金の髭を持つ男がそう言った。

「魔王四天王、シシ族のカイヤン」

四天王と言うくらいだから、かなり強い？

「セイゴ。先に橋を渡りなさい！」

シイラは、魔物達と対峙しながら言う。

「私たちは大丈夫だから、先へ行きなさい！」

他の村人達も僕を促す。

「で、でも……」

「タウナギ爺、セイゴを頼むわ！」

18・僕はずっと抱えられたままだよ。

タウナギ爺さんに抱えられたまま僕は、橋を渡り終える。

「シイラも、はや……」

僕の言葉が終わらないうちに、シイラは橋に火を放つ。

「あ……橋が……」

「シイラが、村の皆が……」

僕はわめくが、僕を抱えるその腕に力が弱まることがなかった。

爺さんは、僕をしっかりとつかんで離さない。走るのをやめない。

「爺さん、そんなに走ったら、死んじゃうよ！」

「ワシは、大丈夫じゃ。心配するな……」

爺さんは、一昼夜休まず走り続けた。

18-2・守るべき少年（シイラ視点）

「セイゴは、行ったわね……」

爺に抱えられて遠ざかっていくセイゴを視界の端で見送った。老人で人を抱えながらとはいえ、ウマ族の全力疾走に敵う者はそうそういない。

「餓鬼と老爺は、逃がしたか」

シシ族の男は、舌を鳴らした。

「貴方の相手は私よ」

「トラ族の娘か、相手にとって不足はない」

シシ族の男は魔物から降り、剣を構える。

（父さん、母さん……シクリッド……）

シイラは、剣を握り締める手に力を入れた。

「セイゴ……」

19・涙を拭くよ。

爺さんの走りが弱くなっていく……そしてついに草原に倒れこんだ。僕は投げ出されたが、すぐに爺さんの元へ駆け寄る。

「爺さん！」

「ワシは……寿命じゃ。老衰じゃ。気にするな」
そうでないことは、僕は分かっている。

「……ワシは、少し休んだら追いかける」

「……爺さん。お礼は、次に会った時に言うよ。だから……」

「ああ、分かった……ほれ、さっさと行くのじゃ」

涙を拭いて、僕は爺さんの方を一回も振り向かず走り出した。

19-2・孫のようだった少年（タウナギ視点）

……まるで、孫に見取られているみたいじゃの。ワシは幸せ者じゃ。

「……爺さん。お礼は、次に会った時に言うよ。だから……」

セイゴはその黒い瞳を潤ませて、ワシの手を握っている。

「ああ、分かった……ほれ、さっさと行くのじゃ」

セイゴはうなずくと、走り出した。

……そうじゃ、若者は生きねばならん。前を向いて走らねばならん。

ワシは、小さくなって行く少年の影を最後まで見届けた。

「最期に草原を……駆け……できて……」

20・力が欲しいよ……

僕は走った。

生きのびるために。

みんなの分まで、生きるために。

何もできなかった。

僕は、弱い。

僕は、未熟だ。

僕は、何も知らない。

駄目だ。足が限界。あそこに泉があるから、そこで少し休もう。
僕は泉の畔に倒れこんだ。

爺さん、シイラ……

無意識に涙が出てきた。

「私を助けて……闇の中から……」

夢の中で聞いた声が、したような気がした。

「僕は、何の力もないよ！ 誰一人、守れなかったんだから！」
僕は、大声をあげて泣いた。

21・女神様が出てきたよ。

「坊や？ 何で泣いているの？」

僕が顔を上げると、そこには美しい女性がいた。新緑の長髪から角が生えているが、それは恐ろしいものではなく、神秘的な輝きを放っている。

「女神様？」

「いいえ。あたしは、神からこの地域を守護するよう賜ったタツ族よ。聖獣とも呼ばれているわ。名前は、ラミーノーズ」

「僕は誠吾です。ラミーノーズ、お姉さんにぴったりの綺麗な名前ですね」

僕は、涙を拭いた。女性の前で泣いてなんかいられない。

21-2・泣いていた少年。（ラミーノーズ視点）

見かけない黒髪の少年が泣いていた。あたしが声をかけると、少年は顔を上げた。涙に濡れた瞳までが黒かった。

「女神様？」

少年はかすれた声でそう言った。

あら、嬉しいじゃないの。

あたしが名乗ると、少年は「僕はセイゴです」と返してくれた。そして、少年は微笑んで、あたしの名前を褒めてくれた。

笑顔がかわいい！ セイゴ、気に入ったわ！

あたしは、この辺では見かけない種族のセイゴを観察した。あたしは、ある事に気がついた。

22・僕にも魔力があったみたいだよ。

「あなた、珍しいくらい澄んだ魔力を持っているね。まるで今まで遣ったことがないみたいに、何物にも染まっていない」

守護者である聖獣に嘘についても仕方ないから、僕の身に起きたことを話した。

「魔法のない世界から……道理で魔力の変質がない」

どうやら、魔法を使うたびに、魔力に世界の理が混ざっていくらしい。体内に内包する世界の理が大きいほど魔法としての完成度は高くなるが、その代わり反する理は習得し難くなるらしい。

23・まだ魔法が使えないみたいだよ。

「あなたに内包する魔力は多いけれど、この世界の元とは質が違うように思えるわ。この世界の理になじむまで、魔法を使うのは難しいかもしれません」

「そうですか」

「でも、その魔力量ならば精霊と契約することで、精霊を媒体に簡単な魔法を使うことができるでしょう」

「契約？」

「あたしが、あなたに力を授けましょう」

ラミーノーズが詠唱すると、誰もいなかった場所に二人の女性が立っていた。

「あたしが使役する風と水の精霊よ」

24・風の精霊が仲間になったよ。

「契約を」

現れた風と水の精霊が言う。僕は彼女らが言う通りに契約の言葉を交わした。

「私の加護は、機動力と情報の強化。外から来る力を操ります。体が軽くなっているはずです」

僕は軽く地面を蹴ってみた。

「うわ！」

人一人飛び越えられそうなくらいの高さまで跳んだ！

「すごい！」

「喜んでいただけたようで何よりです。それから、慣れが必要です。が、気配察知や隠された空間発見と言った外からの情報も得られるようになりますよ」

25・水の精霊が仲間になったよ。

「私の加護は、生命力と肉体の強化。体をめぐる力を操ります。生命力が強化されたので、軽い怪我ならすぐに治癒します。それから、足元の石を」

僕は言われるがまま、足元に転がっているこぶし大の石を握り締めた。力をこめると、くだった！

「おお！」

身体は軽く、そして体力も充分。精霊の加護だけでも、充分強い！

「私達は、常に貴方と共にあり、貴方を見守りますね……願えばいつでも参上いたします」

精霊は、光になって消えた。

26・勇者様って言われたよ。

「精霊の加護だけで、そこまで強化されるとは……」

予想を超えた強化のされっぷりだったらしい。

「貴方なら、闇に囚われた神を、お救いできるかもしれません。どうか神をお救いください。勇者様」

彼女は急に改まる。

「勇者って……僕は、ラミーノーズがいなかったら、一般人以下だったよ。それに、僕はまだ何もしていないから、勇者でも何でもないよ」

「神が貴方を選んだ理由が分かったような気がします」
ラミーノーズは微笑んだ。

27・近くの町の場所を教えてもらったよ。

「あたしも、セイゴについて行きたいのだが、基本的にこの土地から離れられないんだ」

精霊達がいるとはいえ、知らない土地を独りで歩くのは不安なのだが、こればかりは仕方が無い。

「あちらの方向に行けば、大きな町がある。そこならば、何か仕事も見つかるだろう。こんな事くらいしかできなくて、すまぬな」

「いえ。ラミーノーズさん、本当に色々ありがとうございました！」

僕は彼女に別れを告げ、その城下町へ向かうことにした。

28・城下町のような所に着いたよ。★

風の精霊のおかげで、体は軽く。水の精霊のおかげで、体にたまった疲れが流されていく。疲れ知らずで旅は順調！

大抵の魔物は蹴り飛ばせば殺すまで行かなくとも、気絶させることができたし、精霊を喚んで魔法を使うこともできた。

しかし、魔物とはいえ命を奪うのは、まだ躊躇してしまう。

「こればかりは、まだ、勇気が出ないな」

魔物を蹴り飛ばしては気絶させ、そのうちに逃げる……を繰り返して、あつという間に、街にたどり着いた。

28・城下町のような所に着いたよ。★(後書き)

>i12348—312<

29・町は獣人の宝庫だったよ。

「うはー！」

ウサ耳♪ ネコ耳♪ 動物耳♪ あ、トカゲのような人や
トリのような人もいるんだね。

「色々な種族がいるんだな」

シイラの村はトラ族が多く、他の種族は、僕を含めても数人くらいしか見かけなかったのだが、この街は、色々な獣人が集まっている！ これだけ大きな町だ。色々な所からやってくるのだらう。

でも、僕と同じ形の人はいないみたいだ。そもそも、僕はこの世界の人間ではないのだから、仕方ないのかもしれない。

30・女の子の悲鳴が聞こえたから行ってみたよ？

「怪我したから治療費よこせ！」

男が女の子に言っている。

盗み聞きして分かった事、奴は当たり屋だ！

僕は無言のまま、男の背後に立つと振り上げている腕をつかむ。

「何だ、お前！」

「確かに、これは酷い……」

僕は少し力をこめた。

女神にもらった力のおかげで、男の骨は音を立て折れた。

「ぎゃあ！ 殺される〜」

男は、路地の奥へと悲鳴を上げながら逃げていった。

「……やりすぎちゃった」

この力の扱いに慣れないと。

僕は反省した。

31・名乗る程の者では無い、と言って去って見たかったよ。

「大丈夫か？」

僕は、赤毛でちょこんと垂れた耳がかわいらしいウサギ族の女の子に話しかけた。

「おーい」

金色の瞳を見開いたまま動かない彼女の目の前で手を振る。

「あ……はい。大丈夫です。あ、あの、助けていただいてありがとうございます」

慌ててお礼を言った。ふわりとした髪とドレスが揺れる。

「私はメルルーサです。あなたは？」

「名乗るほどのものじゃないけれど……」

彼女の純粋な期待する目に負けた。

「僕はセイゴです」

31-2・助けてくださった少年。（メルルーサ視点）

私の前に現れて、助けてくださった黒い髪、黒い瞳の少年。

あう、格好良いです。

何も言わず去ろうとしたのですが、少し強引に引き止めてしまいました。

困らせてしまったかしら？

彼は、サル族でセイゴというお名前。

どこから来たのか尋ねてみると、最近記憶喪失になったらしく、この地方のことがよく分からないらしいのです。この町に来たのも、記憶を取り戻す手がかりを探すためでしょうか。

ああ、私に何かできることはないかしら。

32・助けたのは姫様だったよ。

「お礼がしたいの、私のうちへ来て」
メルルーサが、僕の腕を引っ張る。

あれ？ そっちはお城ですよ？

そういえば、この子の服は高そうだけれど……まさか。

はい、予想通り、お姫様でした。

城の客間に案内されて、そこで王様と会うことになりましたよ。

玉座の間じゃないのかって？

いち庶民のために、人を集めてあんな広い部屋で思うと思ってるの？

まあ、僕としては、助かったんだけどね。
でも見てみたかったかもしれない、玉座を。

33・豪華な部屋にいと、それだけで緊張するよ。

お礼にお金のような物を頂いた。文無しに等しい僕にとって、素直に嬉しかった。

僕が記憶喪失だと思っている姫は、僕がお金の単位が分かっていないという事に気がついたらしく「城下町の宿屋で1ヶ月くらい生活できる量」と教えてくれた。

「そんなに？ いや、多すぎますよ！」

たくさん貰う分には嬉しいのだが、こんなに多いと逆に恐縮してしまう。

「ふむ、その謙虚さ、今どき珍しい」

なんだか王様に気に入られたような予感がします。

33-2・今後が心配な少年（メルルーサ視点）

彼は純粹に喜んでくれた。

そんな彼が、受け取ったお金の一枚を眺めて、目を細め首を傾げているのを、私は見逃さなかった。私は彼が記憶喪失と言うことを思い出し、もしかして、お金の単位が分からないのではと思って、価値を教えてあげたら、とても驚いていた。

こんなことで、生活できるかしらと、心配になる。

ああ、せめて、戸惑いなく生活ができるようになるまで……

そうだ、お父様に、相談してみよう。

「お父様、実は……」

34・城に滞在することを許されたよ。

「今、聞いたのだが、記憶喪失だそうだな」

「はい」

「ならば、ここにしばらく滞在することを許す」

その言葉に、メメルーサが「お父様大好き！」と飛びついていた。

「閲覧できる物に制限はつくが書物館の使用も許可しよう」

シイラの村にいた数日間だけじゃ、この世界の常識は把握できなかったので、これはかなり助かる。

「あ、ありがたき幸せ……です」

王族に対する最上級の敬語なんて分からないから、おかしい感じになっちゃうよ。

35・騎士様についていくよ。

王様は隣の騎士に何かをささやいた。

「彼が、部屋まで案内してくれるだろう。ついていくがいい」
王様が立ち上がり、僕を促してくれた。

「あ、はい。王様、僕はこれで失礼します」

僕も立ち上がり、深々とお辞儀をした。部屋を出る前に一応もう一度、王様の方を向き軽く礼をしてから、騎士の後についていった。

「緊張した……」

「ははは。初めて王様に会う奴は、みな緊張しているさ」

案内役の騎士は、気にするなと肩を叩いてくれた。

35-2・礼儀正しい少年（王様視点）

「僕はこれで失礼します」と、頭を下げて少年は去っていく。

相手を敬い、不快にさせない丁寧な振る舞いをするあの少年……この国にはない作法ではあったが、一応の礼儀作法は身についていると見える。

多少ぎこちないが、自然に出てくるその仕草は好感が持てた。記憶を失っていても、体が覚えているのだろう。つまり、その動作が無意識にまで染み付くような生活をしていたと言うことだ。

「あの少年は、磨けば光るやも知れぬな……」

36・騎士様と仲良くなったよ。

寝泊りは兵士達の宿舎。姫を救ったとはいえ、どここの馬の骨か分からない奴を、城の中には置かないか。夢のウサミメイドが専属になるという夢は叶わなかったが、文句は言うまい。

「寝泊り場所の心配がないのは、いいねえ。しかも食事付き！」

兵士の宿舎は気楽で良いよ！

「おまえ、本当に欲がないな」

名前はヴァリアタスと言うネズミ族の騎士なのだが、僕に好意的ではあるようだ。

「何か困ったことがあれば、できる限り力になろう」

37・今日は姫が、城を案内してくれるよ。

姫と過ごすのだから、それなりの服装にしないと。

城での服装は、制服でも失礼が無いかと聞いてみたら充分大丈夫みたい。

最初姫に会った時は、シイラに貰ったいわゆる庶民の服だったから、姫は服を贈る気満々だったみたいだけど、服までお世話になるわけ行かないよね。変な迷惑かけないで、良かった。

制服はシイラの村に行ってから、ずっと荷物袋の中だったし、久しぶりに制服に袖を通すなあ。

「ああ、この前よりも、ときどきする」

37-2・珍しい服を持つ少年（メルルーサ視点）

セイゴが着てきたのは、立派なつくりの服でした。彼はやっぱり富家か良家の方なのかもしれないですね。

彼は「この服と寝巻きだけが、僕の世界のにおいがする物」と言っていました。

その服と寝巻きだけが、セイゴの手がかり……

胸元の刺繍に描かれている紋章は、見覚えのある物ではありませんでした。私の知らないような、よっぽど遠い場所から来たのですね。

それにしても、似合っています……ああ、うっとりしてしまいますわ。

38・今日は、本を読んだよ。

やっぱり、地球とは大きく世界は異なっている。

魔物と魔法が存在すること。

科学は地球とは違う方向で進化していること。

気候や文化や生活は、だいたい地球とおんなじ様な感じだけれど、大陸は1つしかないこと。

読めば読むほど、ここは異世界なんだと実感する。

異世界から召喚された者はいたみたいだけれど、どれも神話的でどこまでが事実なのか見当も付かなかった。

「神、を救えば帰れるのかな」

そうであって欲しいと僕は思った。

39・今日は、魔力を測ってみたよ。

僕は、魔力測定器に手を触れた。しかし、反応しなかった。よくあるように、測定不能で壊れるのかと思ったのだけれど……？

「セイゴから魔力は確かに感じるのに……」

姫は自らの魔力も測ってみるが、きちんと反応しているらしい。

この世界の理に慣れるまで魔法は使えないってラミーノーズが言っていたし、属性がまだないと言うことなのか？

反応がないのは僕の魔力は異世界の物だから、この世界と質が違うのか？

勝手に自己分析する。

40・都合が悪いことは、記憶喪失のせいにするよ。

「僕、覚えていないんだ。色々試して、思い出そうとしているんだけど」

僕は嘘をついた。いや、本当に分からないから、全部が嘘ではないのだけれど。

「い、いえ、ごめんなさい、私ったら……記憶が戻れば、きっと思っ出しますわ」

「ありがとう、メルルーサ」

僕の方こそ、ごめん。本当のこと言えなくて。

魔法がまだ使えないとなると、剣を少し習っておいたほうがいいかな。ここを出るときまでには、少しでも慣れておいたほうがいい。

40-2・魔力があるのに反応しない少年（メルルーサ視点）

測定器が反応しないって、どういふことなのでしょう？

私を知る限りの方法を試しても、セイゴの魔法を引き出す事はできなかった。

何かが魔法の発現を阻害しているのでしょうか？

彼は、もしかしたら、何者かに記憶と共に魔法も封じられているのかもしれない。そうでもなければ、魔力があるのに魔法が使えないなんてありえないのですから。

失った記憶が戻れば、原因も分かって、解決するのに！

……私ったら、あせっても仕方ないのに。

41・精霊がいるから大丈夫だよ。

「魔法が使えなくて、旅も大変でしょうに」
姫は心配してくれた。

「……実は僕には、精霊がいるから、魔法が使えなくても、今のところは、そんなには困らないんだけれどね」

「精霊ですか！」

姫の瞳が好奇に輝き始めている。

あれ？ 精霊使いって、めずらしいの？

「ちょっとだけ手伝ってもらっているだけなんだけれどね」
「それでも、すごいですう」

僕は、姫に精霊達を紹介した。

「はじめまして、姫」

精霊達と姫はすぐに仲良くなった。

41-2・精霊使いの少年（メルルーサ視点）

精霊は美しいですね。私も大人になったら、あんな風になりたいです。

そうすれば、きっとセイゴも……（ぽうつ）

話を聞いてみると、精霊を使役していると言うよりも、加護をもらっていると言ったほうがいいのかしら。

記憶を失ってから、精霊と知り合ったと言っていたので、まだまだ初心者なんですね。

「私の周りに精霊使いの知人はいないので、何の役にも立てないです」

「き、気にしなくてもいいよ！ だから、そんな落胆しないで！」

42・剣の基礎くらいはなんとか形になった程度だよ。

「僕に剣術を教えてください。いや、ちょっとだけ訓練に参加してもいいですか？ 邪魔にならないように、隅の方でやりますから」仲良くなった騎士のヴァリアタスに相談する。

僕は、兵士達の訓練に混ざることになった。

体育の授業で、剣道を少しやって以来だよ。

普段使わない筋肉を使っている。

精霊の加護がなかったら、乳酸たまりまくりで、すぐにばてていたよ。

これなら意外と早くに、ぶれないで剣を振れるようになるかもしれない。

42-2・剣術初心者の少年。（ヴァリアタス視点）

最初は、素人が剣を初めて握るかのような動きだった。確かに、教えてやらんといかんな。

今までどうやって旅してきたのか……

ああ、そういえば記憶喪失だったな、ならば納得がいく。

しかし、細い体のわりに基本となる体力はあるらしい。兵士達の日常訓練のあとを苦も無くついていっているのだから。覚えるのも早い。

記憶は失っても、体は覚えていると言う事か。

この調子なら、冒険者になったとしても、すぐに死ぬことは無いだろう。

43・そろそろ旅立とうと考えるよ。

城で過ごし始めて、しばらくたった。

その間、剣や魔法、一般常識を学んだ。

魔法に関しては、相変わらず自分の力だけでは発現していない。

しかし、姫の協力もあって、精霊の力を借りれば簡単な魔法なら使えるようになった。

剣の方も何とか様になってきた。

「そろそろ、旅立とうと思うんだ。いつまでも、お世話になるわけにはいかないしね」

「ずっと、離れるわけじゃないよ。だから、悲しそうな顔しないで」
「たまに、会いに来てね」

44・とうとう旅立つよ。

そして、旅立ちの日、姫から装飾が美しい質素な首飾りを頂いた。
僕からもお礼に何か、そうだ！

制服の第2ボタンをちぎって姫に手渡した。

「僕の国では、旅立つ時に心臓に近いボタンを異性に渡すっていう習慣があって」

本当は卒業式の時に、求められたら渡すんだけど、まあいいよね、ここ異世界だし。

「お礼にしてはしょぼいけど、姫の瞳と同じ金色だから」

姫は赤くなる。

「いいえ。とても嬉しいです」

僕は姫に送られて旅立った。

45・武具を買うよ。

僕はまず、武器と防具をそろえる事にした。
それがなければ、旅はできないからだ。

さすが、城下町と言ったところだろうか、品揃えはすごい。

僕は動きやすさ重視で防具を選び、武器は竹刀に似た叩き斬る事に特化したような武器にした。

戦闘は慣れていないから、少しでも慣れている形の方が良いと思ったのだ。

「王様にもらったお金……すごい役に立つ……」

ちよつと良い武具一式買っても、まだ余裕がある。

道具屋でも何か買えそうだ。

46・僕には、これしかないから大切なんだよ。

普通の袋を数枚と、ちょっと奮発して盗難防止付きの魔法小袋も1袋買った。

小さめの異空間につながっている見た目よりも入る袋だ。その袋に制服とパジャマとシイラに貰った村人の服を入れる。盗られたくない物は、今のところこれくらい。

あてのない旅をしていてショックを受けるのは、荷物を盗られて今までの思い出がなくなってしまうことだ。

お金はどうにかなるけれど、思い出はどうにもならない。

「思い出だけは盗られたくない」

47・次は冒険者ギルドへ行ったよ。

「ギルドに加入したいのですが……」

僕はギルド受付にいるトリ族のハクレンさんから、簡単な説明を受けた。

ランクは星が増えていく仕組みで、星が5個たまると色が変わるようだ。色は下から順に、赤、橙、黄、緑、青、紫、黒と、なっているらしい。

もちろん僕は、赤い星1つからの出発だ。

黄色がやつと冒険者と認めてもらえる目安。まずは、黄色になる事が目標だね。

「がんばってくださいね」
ハクレンさんも笑顔で見送ってくれた。

48・初めての討伐だよ！

赤の星ひとつの冒険者ができる事と言ったら、街の周りにいる雑魚の討伐くらいだ。

僕は、適当に近くの森へ行くことにする。そして、次々現れる魔物を、退治していく。

魔物が飛び出した。

魔物めがけて、反射的に剣を振るう。

魔物は吹っ飛んだ。

魔物は動かなくなる。

魔物をやっつけた！

なんだか、モグラたたきしている気分になってくる。

ここではいつどのくらいの量が飛び出すかわからないから、ゲームよりも心臓に悪いのだけれども。

49・屍骸に触れるのは、いやなんだよ。

僕にとって、一番の難関がそれでした。

僕の武器は鈍器に近い。だから、骸の外見上は酷い事にはなっていないものの、魔物を倒した証拠となる牙や爪、毛皮を、採るとなると、血が出るのだ。

平和な国日本生まれの僕は、動物を殺すことでさえ精神的に辛いのに……

「生きていくためにはしょうがない。生きていくためにはしょうがない……」

どうしても、それは耐えられない。

……考えた末、精霊の力で凍らせて、風の刃で切り裂きました。

50・だいぶ、戦闘にも慣れてきたよ。

空は木々に覆われて、緑の匂いも深く漂っている。

「ちよつと奥に來過ぎたかな」

精霊の加護で疲れにくい体になってしまった僕は、知らないうちにずいぶんと森の奥まで來てしまったようだ。

（ちなみに、風の精霊のおかげで方向のわからない森の中でも迷うこともない）

「向こうから、強い反応がやってきます。セイゴ様の實力ならば、大丈夫ですが、油断は禁物。氣をつけてください」

風の精霊が警告する。

「わかった」

僕は、身構えた。

51・強敵だったよ。

その全身漆黒で双頭の爬虫類は、なんか強かった。

一言で言うくと、しぶとかった。

繰り出される攻撃は何とか耐えられるものであったが、生命力が半端なかった。斬った所から再生するのだ。

何度か攻撃を繰り返しているうちに爬虫類の体力が尽きたのか、やっと動かなくなった。

空はすっかり黄昏の色だ。

かすり傷程度の怪我も精霊がすぐに治してくれた。

「毎回、ありがとう。助かるよ」

「いえ、セイゴ様のためなら」

そう言って微笑んだ。

52・ギルドのランクが上がったよ。

「こ、これは！」

ひととき目立つ漆黒の牙。

「ああ、これは森の奥の方まで入っちゃって……そのときに出くわしたんだ。強かった」

「この魔物は出会ったら、まず逃げろといわれているですよ」

「え？ 本当に？」

……にしては、弱かったんだけれどな。

「き、きつと、寿命とか病気で弱っていたんだよ」

「……それでもすごいことですよ！」

とにかく、あの魔物を倒したということで、一気にランクが赤の1から緑の星4になっちゃった。

52-2・謙虚な少年（ハクレン視点）

私は、目を疑った。

そこにあるのは、一流の冒険者も逃げ出す魔物の牙。

こんなものまで狩ってくるのだから、もしかしたら、この子、見かけによらず強い？

何よりも「強かった」って、まるでこの魔物の恐ろしさがわかっていない感じの受け答え。

私は確信する。

この子は、魔物の種類とか、強さとかわかっていない。そして、自分の強さもわかっていない？

面白い子ね……

「あなた、今度の武術大会に出てみない？ いい線行くと思うよ！」

53・大会に参加するよ。

ギルドの受付のお姉さんに、武術大会に出ないかと勧められた。

僕は……

……僕は断れない「THE・YESマン」の日本人！ そんなに強く勧められなくても、断れないのだ！

「武術大会はこの国の一大イベントだから、王族もいらっしゃるのよ」

「そうなんですか」

メルルーサ姫も見に来るのかな。そんなことを思いながら、書類を受け取った。

「大会、がんばってね。お姉さん応援しているから」
こうして、僕は大会に出ることになった。

54・とうとう武術大会の日だよ。

大会の日まで、荷物運びといった雑用系の依頼を中心に受けてすごした。

討伐系を受けなかったのは、魔物退治で怪我をしたら、参加できなくなるからという理由だ。

大抵のことは精霊が治してくれるから平気なのだが、万が一ということもあるからね。

噂によると、今回の大会には姫も見に来ているらしい。

警備とかで近づくことができないけれど、姫が見てくれる！
少しはがんばらなくちゃ！

僕は、城下町の中心地にある闘技場へ向かった。

55・盛り上がってまいりましたよ！

闘技場には、人があふれかえり、熱気が籠っていた。

「太陽の光がさんさんと、まさしくその名にふさわしい『あおぞら杯』ただいま開催いたします！！」

司会の言葉と共に、武術大会が始まった。

使われる武器は殺傷能力はないが、ケガをする人が毎回多く出る。油断してはいけないのだ。

僕の最初の対戦相手は、イヌ族のニギス。

たれたイヌミミ、もふもふしっぽだからといって、侮ってはいけない。彼は歴戦の戦士なのだ。

僕は身構えた。

56・攻防で互角なら、主人公が勝つよ。

僕の攻撃は全て空を切った。

ニギスは空中を飛び僕の背後へ回る。彼の剣がかすめる。

お互い決め手がないまま、攻防を繰り返している。

「おぬし、なかなかいい動きをする。しかし、まだまだ動きに無駄が多い」

息を切らしながらニギスは言う。

「初心者だしね」

ちなみに僕は、息は切れていない。このまま戦えば、体力の差で僕が勝つだろう。ニギスにも、それが分かっているはずだが、だからと言って、諦める者ではないのだ。

そして……

56-2・初心者の少年（ニギス視点）

まとう闘気も繰り出される技も未熟で、最初はすぐに勝てると思っていた。

しかし、その認識は甘かった。

その少年は、どんなに活動しても息一つ乱れていないのだ。

「しかし、まだまだ動きに無駄が多い」

勝機があるとすれば、そこだ。

（次の攻撃が決まらなければ……）

拙者は最後の力を振り絞る。

しかし少年は、拙者の渾身の技を食らってなお平然としていた。

（やはり世界は広い……）

拙者は体力の限界が来てその場に倒れてしまった。

57・ほかの対戦者たちも強そうだよ。

初戦を勝ち進んだ僕は、他の参加者の戦いを控え室から見ていた。その中に、知った顔があった。城でお世話になった兵士のヴァリアタスだ。

彼は中々強かったが、2回戦でサツパという牛族の青年に、負けてしまった。

どうやら軽く怪我をしてしまったようで、担架で運ばれていくのを控え室から見ていた。

（千羽は無理だけれど、何匹か鶴を折ってお見舞いに渡そうかな…
…）

僕は試合の合間を縫って数匹の鶴を折り、ポケットにしまった。

58・その魔法剣士は、女の子に人気があるみたいだよ。

「きゃー！ラブカ様」

女の子達の応援があちらこちらで起こっている。彼はそれに答えるように観客席に手を振っている。彼はヒツジ族の魔法剣士、くるふわっとした銀髪が、風に舞いたなびいている。

「君が、僕の相手だね。なるべく痛くないように、終わらせてあげるから」

（なんだかチョット苦手な属性だな）

しかし、彼が僕の次の対戦相手、我慢するしかない。

「こちらこそ、よろしく願います」

僕は、試合開始の合図を待った。

59・突然の乱入者だよ。

試合開始の合図を、僕は待っていた。

しかし、次に聞こえたのは、始まりの合図ではなく……

……爆発音だった。

すべての人が、その方向を見る。

「ま、魔物の大群だ！」

誰かが、そう叫ぶ。

黄色い声援が悲鳴に変わる。

「くっくく……」

不気味な笑い声と共に、まとわりつくような邪悪な気配が現れた。

「わたくし、魔王四天王の一人、ギマです。皆様には、死んでいただきます！」

そこには、黒い礼服を着たネコミミの青年が立っていた。

60・こわいよお……

「まずは、お前たちだ」

ギマと名乗った男が、闇の魔力を放つ。広場の中心にいた僕とラブカは、抵抗する暇もなく吹き飛ばされ壁に激突した。

その衝撃はすさまじく少し血を吐いてしまった。

いくら魔法をかけてもらっても、強化されていても、痛いものは痛い。怖いものは怖い。

自分の血を見たことで、四天王と魔物の大群を見たことで、シイラの村で起こった事が頭をよぎる。

死の恐怖に頭が真っ白になっていく……

（精神的に無理……）

61・久しぶりに、神様が語りかけてきたよ。

……あれ？　ここは？

なんだか、見覚えのある空間だ。

確か、いつも神様が語りかけてくる……夢の中？

「……気がついて」

きたきた。神様来た！

「あなたは、もう力が……あります……」
すでに……力がある？

「あなたの力……気がついて……」
それじゃあ、わからないんだけどなあ。

「いつもあなたのそばに、ある……今、まさに」

そして、声は聞こえなくなった。

そういえば、体のどこかで、何かが流れていく気配を感じるかもしれない。

62・力が目覚めたよ。

控え室から、サツパとニギスといった大会参加者が飛び出し、魔物を駆除していた。

「気がつきましたか？」
精霊が気遣う。

何か妙な感覚が、ポケットからする。そこには、ヴァリアタスにあげようと思っていた折り鶴が震えている。取り出すと、とうてい鶴には見えない巨大な怪鳥になった。

「セイゴ様、これはきつと、あなたの魔法です。血とその紙が反応して……」

風の精霊がささやく。

「これが僕の魔法？」

陰陽師が使う式みたいだな。

63・雑魚い魔物たちを撃退したよ。

折り紙から生まれた巨大な鳥は、次々に魔物たちをなぎ倒していく。あまりの強さに、僕はもちろん、他の大会参加者も、ぽかぁんとしている。

魔物の血に染まることのない純白の鳥は、一通り魔物を殲滅すると、その魔力を失いひらひらと元の折り紙の鶴に戻り地上に落ちた。「セイゴ、よくやった！ この数なら何とかかなりそうだ」
彼らは狩り残した魔物たちを仕留めていく。

四天王ギマは僕を睨みつけている。

もしかして……僕、危ない？

64・魔法の攻撃を受けたよ。

ギマは魔法を放った。

僕は防御の姿勢をとる。

「あれ？」

「静電気みたいなのがバチツと来たけれど、なんとも無い……」
服に体中の毛がくっつくような気色悪い変な感触がするくらいで、
痛みもなしびれも感じなかった。

「僕、静電気体質だし、電気溜め込みやすいのかな」

「確かに体に帯電しています」

異世界に来て、妙な体質になったものだ。

「むむう、体に溜め込んでいるのなら、限界まで食らって耐え切れ
なくなり爆発するが良い！」

65・人間避雷針だよ。

「許容量超えたらどうなるの？」

「どうやら大地に逃げていますね」

人間避雷針だ！

「つまり？」

「セイゴ様には、雷の魔法はあんまり効果がないかと」

「放電する方法と言ったら、これだよね」

体に帯電した雷を、ギマに触れることで開放する。

数発分の電気を溜め込んでいたので、ギマに触れた瞬間、ものすごい音がした。

そしてギマは倒れ、体から煙がでていた。

「……こんな勝ち方って」

なんだか釈然としないものの倒すことができた。

66・魔王を倒してと言われたよ。

四天王を退けたことで、僕は城に呼ばれた。まさか、こんなに早く城に戻ってくるなんて思っていなかった。メルルーサも、久しぶりだなあ……でも今日は彼女に会いに来たわけではない。

「魔王を倒してほしいのだ」

そう、王様直々に頼まれてしまった。

まあ、予想通りの展開である。

「実は先日、勇者が現れるという。神のお告げがあった。わしは、おぬしのことではないかと思っておるのだ」

「ま、まあ、努力はします」

僕は引き受けた。

67・木の棒とお金じゃなくてよかったよ。

「これだけしか渡せないのは心苦しいが」

王様は勇者の旅立ちに、国庫の中から厳選した道具たちを選んで箱の中に収めていた。

使うのも勿体なくなるような、国宝級の物がありそうである意味恐縮してしまった。

「いえ、十分です！　こんなに立派な物を、ありがとうございます！　某ゲームの王様たちが、旅立つものたちに渡した品に比べたら！

「相変わらず謙虚だ」

王様にますます気に入られたよ。

「ご期待にこたえられるように頑張ります」

68・さらに、こんなものまで、いただいたよ。

しかも、荷物持ち用のロバまで頂いた。

「ロシナンテ！」

僕は初めてみる間近で見るロバにを見たたんそう叫んでいた。ロバといえはこの名前。ドンキホーテに出てくるロバの名前。

「いや、こいつの名前は、ホソソメワケベラ号だ」
厩舎の飼育員は言う。

「ホソソめわ……言いにくいよ！」

「それにしてもロバ……馬じゃないのか」
「何を言う、馬よりもロバのほうが、荷物持ちとしては優秀だぞ。山道だろうと、行くことができるんだぞ」

69・僕は、今、魔王城へ向かうよ。

『前略

今、旅は順調です。

サツパ、ニギス、ラブカの3人だけだった仲間も二人増えました。イノシシ族の戦士パーカーホと、ヘビ族の盗賊のスマです。

色々と寄り道しましたが、とうとう魔王城のある島へ向かいます。

仲間がいたから、僕はここまでくることができました。

ちよっと怖いですが頑張ります。

姫もお元気で。

草々
』

僕は手紙で飛行機を折り、姫の元まで届くように魔法をかけ、空へ飛ばした。

そして手配した船に乗り込んだ。

70・刺客がやってきたよ。

「ここが魔王のいる島……」

僕一人だったら、ここまでこれなかっただろう。

魔王の城は、あの急な山岳を登っていかなくてはならない。
下を覗けば、絶壁。落ちたらひとたまりもないだろう。

「わしは四天王の一人、モツゴだゾウ。ここから先は通さないゾウ」
そう言って現れたのは巨体。

「オレにまかせるのだ。かまわず行け！」
パーカーホが、敵を押さえている。

音がして、振り返れば二人は一緒に崖から落ちていくのが見えた。
「ああ」

71・次なる刺客がやってきたよ。

悲しんではられない。

僕らは進まなくてはならないのだ。

「くくっ」

次なる敵がやってきたようだ。

「お前は四天王のワラスボ！ こいつは……僕が倒すよ」

「ヒツジ族ごときがオオカミ族の俺様に勝てるんでも？」

「昔の僕とは違うんだ！」

ひととき大きな爆音して、僕はふと足を止める。

「ラブカならきつと、ヒーローは遅れてくるものさって、格好つけながらやってくるよ」

スマはわざとおどけてみせる。

「そうだね、僕らは先を急ごう」

72・魔王城に到着したよ。

僕たちは、魔王城に侵入した。

最初の部屋は、魔物の巣窟だった！

「きりがないな……雑魚は俺が引き付ける！」

「サッパ！」

「ここは俺に任せろ！」

僕はうなずいて、上の階を目指し駆け出した。

「今日の俺は、疲れ知らずだ」

ザッパの放つ技が、魔物たちを切り裂いていく。

魔物たちの雄叫びとも悲鳴とも、区別がつかないおぞましい声が部屋に響く。

でも、僕らは振り返らない。

サッパ が作ってくれた道だ。無駄にするわけには行かない。

73・天井が崩れ落ちてくるよ!

空を走る雷光が、魔王城を照らしている。時折照らされる廊下は、不気味な静けさを強調している。

その時、何か鈍い音がした。

「あぶない!」

スマは僕を、突き飛ばした。

「え?」

僕がいた場所に瓦礫の山ができていた。

「ああ!」

「おいらは大丈夫だから、先へ進んで!」

岩の向こうから、スマの声がする。

僕は、ほっとした。

「全部終わったら、助けに戻ってくるからね!」

「おいら、役に立てたかな……」

弱弱しく声は、ささやいた。

74・四天王最強の男だよ。

「おや、生きていたのですね。案外しぶといものだね」
天井に開いた穴から、スツと降りてくる男がいる。

「お前は、あの時の」
忘れもしない。シイラの村を襲った四天王カイヤンだ。

「みんなの仇！」

僕は武器を構え飛びかかろうとした。

「待て、こんな所で体力を使うな」

ニギスが僕を制止する。

「で、でも」

「ここは拙者に任せて。コヤツを倒したら、合流する！ 先に進め」

「四天王最強の私に、一人で挑むとは面白い。受けてたとう」

75・とうとう、魔王の間に来たよ。

「一人か。逃げなかったことだけは、褒めてやろう」
赤い玉座の上で、魔王は不気味な笑みを浮かべている。

「ふふふ……我が名は、Characiformes Cynodontidae Hydrolycus scomberoides。高貴な名だろう……」

発音がよすぎて、何言っているか分からねえ。

「カラシふお……（中略）……（後略）」

長いし！ 覚えられないし、つい略しちゃったよ。

長すぎるから、もう魚犬顔魔王でいいよね。

76・絶体絶命の危機だよ!!

僕の魔力で作り出した折り紙の兵達は、燃え尽きていく。魔王にもダメージは、与えているが、さすが魔王は強い。強かった。

いくら力を手に入れたと言っても、魔王はさらにその上をいつている。

「さすが、勇者と名乗ることだけのことはある。しかし……」
魔王は片手を挙げる。

「我には勝てぬ」

精神が高揚し、神経が尖り、全ての刺激に敏感になる感覚に襲われる。

僕には分かる。

あれはやばい。

このままでは負ける。

「ここまでか……」

77・奇跡が起きたよ(1)

「何、弱気になっているの」
懐かしい声が聞こえる。

ああ、僕もう死んだのかな。目の前に、シイラがいるのが見える。
「ここは死後の世界？」

「生憎、私はまだ生きているわ」
「シイラ、生きていたんだね！」
僕は涙があふれてきた。

「セイゴもちょっと立派になったね」
ちよつと、と言うのが気になったが、そんな些細なことは気にしない。もう会えないと思っていた人の逢えたのだから。
「また会えてよかったよ」
「ほら、泣かないの」

78・奇跡が起きたよ(2)

「セイゴ！ またせたな」

そこに、現れたのはザッパだった。

「ザッパ！ 生きていたのか？」

「俺は、あれくらいでは死なん」

「私たちも、いるぞ」

その後ろには、笑みを浮かべたラブカとニギスがいた。

「ワシもいるぞ！」

タウナギ爺さんの声がした。

「ああ、無事だったんだね！」

僕は、爺さんに抱きついた。

「あたしもいるよ」

そこには、ラミーノーズがいた。

「精霊達が騒ぐのでね」

照れくさそうに彼女は言った。

「みんな、ありがとう」

79・奇跡が起きたよ(3)

「おいらも、忘れちゃいやだぞ〜!」

「我輩も参上いたした」

「妾も来てやったぞ」

「あっしも来たでやんす」

「小生も」

「余も!」

柱の影や天井から次々と現れる人々。

「み、みんな!」

死んだと思われた仲間達が、危機に駆けつけてくれた。

……にしても、多すぎやしないだろうか? あなたはどなた?

と言う方までいらっしゃる。僕はこんなにも、多くの人に会っていったっけ?

魔王の間が人であふれそうだ。

みんなどこに隠れていたんだよ!

79・奇跡が起きたよ(3) (後書き)

最終ボス戦で、主人公が危機的状況になった時に、どこからともなく現れる仲間たち。

それは、みんな生死不明の人たちだった。

そういうシーン、ゲームでは盛り上がる場所だけれど、それをギャグ風に仕立ててみたかった。

実はこのシーンがこのシーンが一番やりたかった。

みんなどこに隠れていたんだよ！ って。

ちなみに、この「テンプレのてんぷら」は、この「奇跡が起きたよ」(1)から(3)が、一番最初に下書きが出来上がった。

80・魚のてんぷらにして食っちゃもうよ！

「……きちゃった」

「メルルーサ！」

僕のあげたボタンに鎖を通し、首から掛けていた。

気がつけば、騎士のヴァリアタスや城のみんなもいる。愛ロバのメソソ……（略）までいるじゃないか！

「さあ、みんなの力を受け取って！」

メルルーサの手から、優しい光が現れる。他のみんなからも同じような光が僕に向かって集まってくる。僕の体がその光に包まれる。「みんなの心が、やわらかい……力がわいてくる」

そして、世界が白に溶けた。

81・神様を助けることができたよ。

目を開くと白い空間だった。

……誰かがいる。

あれは、何度も夢に見た神様だ。

「魔王が倒れ、私を封じていた封印が解け力が戻りました。ありがとうございます」

神様はそう言った。

「あなたを、元の世界へ送りましょう」

「あの……もう、皆とは会えないの？」

思い浮かぶのは、みんなの顔。

「大丈夫……願えば、いつでも会えますよ」

「よかった！」

僕は、一度自分の世界へ戻ることにした。

「では、行きますよ」

僕の意識は、白の中に溶け込んだ。

人物紹介「ねうしとらうたつみうまひつじさるとりいぬい」

スズキ セイゴ…サル族？ 主人公

シイラ…トラ族 お姉さん

タウナギ…ウマ族 爺さん

ラミーノーズ…タツ族 聖獣

メルルーサ…ウサギ族 姫

ヴァリアタス…ネズミ族 兵士

ハクレン…トリ族 ギルド受付

サツパ…ウシ族 戦士

ニギス…イヌ族 侍

ラブカ…ヒツジ族 魔法剣士

パーカーホ…イノシシ族 戦士

スマ…ヘビ族 盗賊

カイヤン…シシ族 魔王四天王最強の男

ギマ…ネコ族 魔王四天王

ワラスボ…オオカミ族 魔王四天王

モツゴ…ゾウ族 魔王四天王

犬魚顔魔王…本名長し

最終話・願えば、またいつでも、会えるよ。

声が聞こえる。

「もう、この子ったら、いつまで寝ているの？」
優しい誰かの声。

僕の体はまだ目覚めていない。

「今日は友達の家へ行く日でしょ」

「ああ、そうだった！」

僕は飛び起きる。

「世界を救った勇者が寝坊じゃ、どうしようもないよね」
今日は向こうの世界へ行く日。

「行ってきます！」

首にかけて姫からもらった首飾りが、きらりと光り、僕は世界を
飛んだ。

魔王は倒したけれど、あの世界での冒険は終わらないのだ。

まい。

おし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5926m/>

テンプレのてんぷら

2011年7月22日10時52分発行